後撰集新抄 冬 八

後撰和歌集巻第八新抄

冬歌

題しらず　よみ人しらず（も抄）

初しぐれふれば山辺ぞおもほゆるいづれの方かまづもみぢらん

○此歌ハ上下秋ニ出たれば此所ニは除くべきなり。

はつ時雨ふるほどもなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり（紅葉六帖　あまねく色づきにけり　是本又是則集　うつろひ　一本）

○ほどもなくと云ことを。かけ合せたるなり。一首のさまハ明らかなり。

神な月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬の初なりける

○ふりみふらずみハ。ふりもしふらずもしといふこゝろなり。時雨のふるさまさだまらぬものなり。かくさまの詞の云さま。まりの詞あり。るなりまりハ　もあるの詞なり　るな

ふりみふらずみを俗にふりもしていまちまちフルヤウニモアリ降ラヌヤウニモアリテといふ

きし。山ことなど
の仰と。もと八回
しかれど。註して
く。ぞ異なり。

こと。縣居大人もいはれたり。ならさ。ふりと。ふらずさ。ふりもあり
ふらぞもあり。山るとさ。山るあり。風子とさ。風子ありとらぬべきな
を。すべて何のをとを解くと。佐ふ子註して解く
とさ。異なる事あり。てを上秋上にも書くいへり。

夕されで
冬されバさほの河瀬(ら)にをるたづ(の)もひとり寝がね声をぞなくなる　（のをぞなく異　もなく㐂　伊勢集）

○抄子ハ。冬の夜もく床さむきに。佐保の河への鶴の声を聞て。我身を
つまて何ちれ思るんなるべし　とあり。此うたと思んみハ。上下の句お
身に我ぬくと云てとを加へてんよべし。　能思ども。此哥猶いかゞ地
とあるハ。意の足のぬくも聞ゆるなり。伊勢集の方。三句のとあるさ。
みる鶴のぬくと云さまに。以上を序なれど。ことに穏なるさまなり。
師も意の奇なり。抄の説いかゞなりといはれたり。
ひとり寝る人のきかくにかゝる身にもふる初しぐれの事

○さらでもさびしき。独寐乃身にはすくのに十月乃空を餞にも時雨
のふるをかなしむなり。　三句。きかくにを。すくにの。延ちりたるにて。
即。きくにといふんがめし。に文字力あり。此に文字などハ。云こなく
へたるがめき　ひとは何などの。軽く添
とハ異なり。　身はかにもといへるを。霰雨乃初て降る事になあ
らび。降来るさ雨の。いとあそたしきをいへるなり。万葉十六
に将死命爾波可爾成奴云 とあるも。急にといふんがめし。師も此
雨のにもこのを。疾くといふにをく。アハタヽシク　コトくシク。サ
ワガシク　コチタクなど云をに通へり。万葉子をやといふ言を。甚
のをふ以てるをあり。巻八に。やどにある桜乃花は今もかも松風疾
みつちりおりらん。十一に。詐急者中ハよどませ云こ。とあるも。初句
をうちさくハとして。甚しきをにになるなり。又日本紀十三に。二と

めでたくはめでたしとよめるも、早に甚の字ありて、まぎらはし。考へ合
すべしといはれたり。初時雨とある、初の字になづむべからず。ここは十月になりて、はじめてふるをよめるにて、さ
しも奇のまにかゝは
ることにもあらぬぞ。

秋をく(はてもみえ)ぶれふりぬるに我なれば、ちは言の葉をなすからみむ
○おもふ人、かはりし人の、契し詞をも、外にちらしなどせしなり。よみける
なるべし。時雨ふりぬると、我身のふるされけるにいひかけて、言葉
乃おちくるを、落葉にたとへたるなりとあるがごとし。 狂思すよち
ふ言の葉とは、みなど他(ホカ)へちらしたるをあるなどをよみたるにも
宜し。

ふく風の色もえへねど(夕暮き)ぞ我ぞむとりぬるより(ある人の許)身にぞしみ(ぬ矣)ける
○二句、古今万葉にはゆくも来らねど、とあれども、こはよろしかるべ

くも思はれぞ。六帖と異本との中にていづれかあるべし。一
首の意も明らかなり。六帖、吹く風は身にもしみける秋風をいろなき
き物と思ひけるかな。

秋をく我身時雨ふり(と一本又抄)ぬれば言の葉さへ(ぞも一本)にうつろひにけれ(ける矣)
○此歌は、古今恋五に、小町、今はとて我身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり、と出たり。 我身
が古きものになりつれば、今は飽(アキ)あひて、はやく契おきたる詞まで
で違ひ侍ることなり。時雨をふりといひ、又言の葉うつろふと
いへる料なりと、顕昭大人いはれ、此歌を二三一句と句をつづけ
てよむべしと千秋もいはれたり。されど、かく句の次第をうへてよん
ときすなり。すべて詞をいきてかの本にあるとは、まことにもあるま
あなきバなり。此事は上手といへり。然れども、せんなく必ず大
むねをんけんには、便あるをとりて、古くよりいひ来るを
なれど、古き人の説あるなどは、今もおしもちぶべし

かみな月時雨ばかりをふらずして雪がてにさへなどかなるらん　伊勢集

○此歌ハ、伊勢家集ニ男云ヽ、加へし女云ヽと十二首ぞありの贈答あ
りて、但し此贈答ハ仲平公などにもあらで、他の男の、たゞ戯すがらくきこゆ。「かくいひつ、おなじ人よ
んといひしかも、えこそ初雪のふる日、神な月時雨ぞかゝりまさると、
とあり、是ぞよくきこえたり。雪がてハ、雨も雪ともまじるをいふ。此通しに、
雪まぜてふるべき物をかくな月時雨ぞ袖の露もこぼすれ、とあり。
此奇ハおしんはかゝれど、初句、雪まぜてとあるを、此雪ぞてふの
ことをうけたるなればこそ、此夫木一。延喜三年正月廿七日、京極御息所ゆき
詞をんゆゑにハよろし。不奇合。初春、よき人しるべ
ぞてふふく吹風ハさやかれど青山なれぞさむからなくに、などゝも
ありて、和字合字などのこの詞　俗言に、カテ、クハヘテ、など云ことなて、万葉十六ニ、「…」云、とあるを
なるを、行難げと云をふうけていへるなり。時雨も雪も
もしるべし。
ふれぞふまふてまれて、行難きさまにぞいふぞなからんとなり。

さ」乃詞を、歌の表の、時雨に雪の添りたる方にとへるなり。されど、家
集子の「とある方、まさるべく覚ゆ。

かみな月しぐれとゝもに神な備乃杜の木葉ハふりにこそ婦連

○是かくれたる所なし。「ふりにこそふれ」ハ、降る事ハ時雨ぎりなるを
いふなり。上夏に、「雨子きこえて、とある所子歩しくいへるごとし。

女につかはしける

たのむ木もかれきてぬれバかゝなる月時雨にのこもぬるゝころの郷　袖抄又異本

○我がよるべと頼みする君の、絶果たれバ、今ハ涙子袖のゝ濡るゝことを
かなと云ふを、かさやどりと頼む木陰の無くなりしより、時雨子袖
のぬるゝにそへていへるなり。意味なる事ハ論なし。　末句ハ、異本
抄本ともに、袖とある方まさるべし。

山へ入るとて。（不是）　　増基法師

かくなげきしぐれむかり我身にそへてしらぬ山ぢにいふぞ悲しき

○今。山に入んとするに。世にあまりし時のものりて。身に添ふ物とては。たゞ時雨のみなるぞ悲しきとなり。　或人は。時雨むかりと云に。我身の旧ぬる事をよせなるにもあるべしと云へり。　又思ふに。時雨は。山廻りすといふ物なれば。山に入るといふによしありて。かくいはれけるならんか。とも思へど。いかゞあらん。すべて。かゝる歌などは。おのづからにこそあやかなへてこそ。かくりて一首はあはれを先にこそあるものなれむなり。新古今 雑上 に。世をそむきなんと思ひ立けるころ。月を見てよめる。寂超法師。ありし世の月よりほかにたれをかは山路の友と契おくべき。とあるなどをも思ひあはすべし。　二の句。むかしかりの詞は。是也むかりなる秋の夜は月。暁ばかり うきよの事なし。などあるときは是にて。而已 俗言にバカリといふ。となり。かくつらふを。後世の格乃ごとくなれども。旧例に古くよりかく有様になりけり。古今 夏 是よふ紀友則の時鳥ぞかりけ昔なりけれ。昔来万葉。是天川秋の夜量（バカリ）よど由なん流す身の程をとむべく。など旧例あり。　しらぬ山路しる思てわけ入る事もなき 業平 モ知ラヌ山 となり。世城背（離）て入ふ山をいふなり。新古今 雑上。是何ぞ我といふ。

苔の袂に露おきてしらぬ山路の月を見るべき。などもあり。

十年ばかりに。大江千古 里是 のもとにはちんとてまかりたりけれど侍らざりける程なりければ も侍らぬなどなれば。かへりまで来て。后て遣しける。　藤原忠房朝臣

○侍らぬなどては。千古主の物へ行て。家にみえざる事。と云

事なりける故に。友房郭をいでゝ。ふるさとに帰来て。さて千古
主の許て添られし歌を見て。此哥をやられたるなり。
もみぢ葉をゝしき錦と見しかども時雨とゝもにふりてぞきにし 出てぞ六帖又一本
○此哥乃末句。今時本に。ふりてぞきにしとありて。詞乃玉緒五の巻八丁にも。ふりて
をしと結ぶ格の中に出されてハあれども。今思ふ所。此哥。詞のうへ
ふりて而とのゝ云てハ。趣を更えがたし。ふりて而来くといふ事。時雨子は
さる事なれども。人の体寄る事にてはいふべくもあらねばなり。契沖
法師も。ふり出ての誤かといはれ。六帖子ハ。ふり出て而曽来之にしと改る
に従ひし。ふりて而と云て。ふり出る事にて。もとよりなるべくもあ
らねば。必出てぞと改るべき詞なり。ふり出の。出の詞に用あまたあれ
ば。これもと。ふりてぞとやうにありしを。てしぞとは誤まるなる

べし。かくて一首めは妻く次の哥は下にいふべし。

返し

大江千古

もみぢ葉もまぐれもちらし乃れに来て加へらん人をふりやとぞ見ぬ
○此哥。末句のてふ言は。詞乃玉緒四の巻八丁九丁に。やそのてふ乃やとは
挙られたれども。古今一、花ぞのゝやゝ人に加さらん桜花ちごとにおれ
て家づとにせん。同五、うゑし時花待遠にありし菊うつろふ秋にあ
はんとやみし。同十一、秋の田乃ほのかに人をてらし螢づまほ光の皆
ゐも我や忘るゝなどの哥と同じくつゞけられたる也。同玉緒旧巻十丁
十一丁に。○やぞと挙られたる。古今一、春ぞ梅のやゝきあやなし梅の
花いろこそ見えね香やはかくるゝ。同八、しろともしれとも見えよ

きりぎりすは秋のあはれしくやハあらぬ。などく同じ類にて。たゞ意は
うつへ返るいもせのところやまと云る意たる方なり。総るに此哥
後撰 なるは。やまとなるをハ本より論なく。其中にても。出とふ
一ふしあるやまとかきにて。同書に上の十一丁十二丁。○やまの詠ぶきに。又
一格。古今一 橘花ちるらはに来る事だにも人のねに何これやまと勢
ぬ。同云 時鳥こゑも聞えず山彦は外に鳴音をこたへやまとせぬ。伊勢
集。秋の夜に出ぬときくを恋すきこゑのびに我をすゝきやまとせぬ。
後撰十一。道遠しいでやまとしれぬ逢坂の関のあなたハうみといふ
ふなり。など出されて。件の哥どものやまとハ一つの格にて。初学の輩
のわかちがたくおもふなり。古今のあかまやまとせぬは。何とてあかま
ぬすぢ。何のまよかしといふ意。あるへやまとせぬは。何とてこたへぬ

まで答へよかしといふ意なり。その外のも。これになぞらへてわきまへ
し。後撰なる。あやまやまとしなぬを。やまとやませぬ。と同意哥辞なり。とい
はれする哥どもに同じきなり。よく味ひ見てさとるべし。このもみ
ぢ葉をおしきにしきと云こと 贈答二首が意ハ。忠房朝臣千古主の。他へゆのせうま
て。なれどの家に来て。さて千古主の行て居しする所を取て。い
ひやりしに。もみぢ葉をおしき錦といふことは。たゞ今君が家に物
きる故に。庭の紅葉の。いとくうるはしくて。何それ此紅葉をふり捨
てか帰らんは。をしき錦なるをハ見つれども。君が居ぬをまばせ
ん方なさに。時雨ともに。ふり出て帰りけるよ。といふなり。
ふり出ての。ふりの詞を。ふりすてのふりに同じく ふりすてのふり
類き方 いざとて立出るやうがらかなり。故にふりて而と云てを詞
なり。

とゝのへざるなり。末摘花巻に「前栽の雪を見たまふ。ふみあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出てゆかん事もあはれにて」など見ゆ。さてかくいひおこされたる返しなれば、「もみぢ葉も時雨もつらし」とは、さるすや侍らん。さては我君なる。紅葉も時雨も、我身に情なきなるよ。君の御まへに来りひて、さやうにいひはらす御心を、何とてつらしとはとがめ給ふぞ。必ずつらしとうらむべきにてありし物を、と言ひて、下句をば、今こそ我が御心を知りもえぬしを、御身に君の心もつらきなれ。といふをふくめ参らするなり。何とてつらしと見えざりしぞと。紅葉も時雨我とがむるが、此歌の意味ある所にて、たゞ彼歌の心なく言をてらさんやうにせぬなど、全く同例の手ふりはなり。よく味ひてさとるべし。又しこれを、古今五の「あかつきふ秋にあきんとや見えし」など同格と見る時は、御まへにきていづら御心を、つらしはとどめざりしや、つらしと見え給ふらんを、といふことわりて、直に御さる人に対ひて恨ることになるなり。かく御する人に対ひてうらむるふくえなるにて、本歌の意は、それもなれ子はあらめど、それは雲に紅葉と時雨をとがめたるをのことなり。此けぢめをよくわきまふべし。さてハ上句「もみぢ葉も時雨もつらし」といふすゞ。さらに合せんよく思ふべし。師翁云わが翁、詞の玉緒にて思ひ及ばれざりつることにも、こゝろびは此歌くはしく考ふるにつきて、くはしくあげつらへる。美んが此考いとよろし。此従に考ふべしといはれより。

だいしらず　　よみ人しらず

神な月かぎりとや思ふもみぢ葉のやむ時もなくよるさへに降る

○紅葉ハ十月を限の時と思ふにや。止む時もなくこと、と云なるべし。
順家集に。此集を撰る時。「神な月のほどより歌を封じて下しつかはす」
「かみな月かぎりとや思ふもみぢ葉の」とあり。おのくうをまるに「か
みな月またで散りぬやいつのまや時雨とともにふりなん」と
あるをも引合せて見るべし。
ちはやぶる神垣山乃さかき葉はしぐれに色もかはらざりけり
○榊ハ霜雪に色の変らぬ物なれバなり。古今 神遊「神がきのみむろの
山のさかき葉は神のみまへにしげりあひにけり」などの類なり。
神上にかけていへる説をあま どそは此寺中てたかなるべし。 神垣山ハ。大和國と云へど。いづ
まれのと。たしかなるも志られぬさ儘なり。されど一所の名にてはあ
るべく思はれず。猶よく考ふべし。
さかきを。荒木田久老神主ハ万葉
考槻落葉三の巻乃別記の説に。榊をいふなるべしといはれたるぞ。いかにも。榊
にも多く香をよきたるにもよくかなひ。まとゆりよき所もある説
にて。志るしがふべくおぼゆ。其中に神武天皇紀大傳歌に。伊智佐介伎（イチサカキ）
未廼於朋鶏句塢（ミノオホケクヲ）云々とあるハ。美者（ミヤ）くき本なるべしといはれたれど。
今思ふに。なほ榊なるべくや。榊にも実の赤く。いと美麗（ウルハ）しきが数多
くふさやかになるもあればなり。そハ。南天燭（俗にナンテン。ナルテンとも云）本な
どの実の大きさにて。いとめでたき物なり。又は榊の中にての一種な
る。香氣ハ。実のなきにくらべてハ。いさゝかおとりざまにハあれど。
なほ榊の中の一種なる事は疑なく見ゆるなり。槻の落葉の全文。また其中にいさゝか
論ふべき事などのあるを。
別記にくはしく出せり。
すまぬ事（是）までも。紅葉にかきて。ひとつ（人子一本）はしたる。

枇杷左大臣

○すまぬ家にとまる今は絶て。我が通ひすまざる家といふことと
なり。此北忠仲平公。太政大臣の聟にとられたるをりける
むすめ。伊勢家集云。時のおほいまうちぎみのむこになりて
ありける程ぞおやもされぞよといひければ。女をろかし
と思ふほどに。此男の許より人来て。コハマヅ。消息ナドアリシヲイフコト、サユ。
此女の家は。五条わたりなるに来て。コレ仲平公ノ。ミヅカラ来タマヒシナルベシ。五
条わたりなるニトアルナド。ヨク味ヒ見ルベシ。かきの紅葉に。歌をなんかきつけ
に。人まかし云々。女かへりきなんうち。あはれにおもほえければ。
風さんとて。絶ずちの紅葉につけてやりける。男いと
をかしと思ひけり。女今は我をはよもとはじと思ひて。大和

へまかるとて。男の許へやりける。三輪の山いかに待見ん年
ふとも云々とあり。
人すまぬ（ぬ美）あれたる宿をきて見れば今ぞ木の葉は錦おりける　（和名乃伊勢集）
○久しくすまぬ家なれば荒たる宿といへり。かく古たる里なれど今
日来て見れば。木の葉の錦なるとなり。錦着て古里へ帰るんをふく
むるにや。とおもふえけり。けふ下句は。かの大和へまかるべきけしき
などあれば。それをふくみてまゐらするなるらん歟。又我が通ひすみたる
ころよりも。すみうくなりたりと云こころもあるべし。

かへし　いせ

なみださへしぐれにそひてふる里は（宿矣）紅葉の色もこさまさりける（こさまさる一本）
○涙さへそへましを。深く濃の紅なるが。時雨にそひてふれぞ。紅葉にも濃

さの一しな可されりとなりとおもあるおめし。須さ人のさ人き。
二句なふるとて云へかくふなり。須の大かさなれバ。いと多きさ方を
いへるなり。須も時雨と同じやうにふるといふなり。又家集子。孫
ずもちの承ゑにつゞきてとあるさ。物思ひに不寝(ネズ)の夜をふくるらさ
たるにもあらんか。但してさ。此集までさ。さしも用なきすなり。又我友。横山直磯云。此二
首。素性集ニ。「うつのをはりかどのくれかへるを。白河子かへさは
はるべし作しに。「人すゐ夏あまりする声をきて見まバ今ぞ本承ゑハ
紛なりける。又てきもみぢをえるに。をりしも時雨すれバ。「みそなお
時雨子にひてふる里さ承ゑはもこさまさりけりとあり。今思ふ
にこさ素性集の方。奇妙となるを。左大臣殿の。やがて伊勢清の作
へきやりかへるなるべし。末句きとのまゝにてさ。今やりかふことに

すこし合ハざれバ。なり(奈)をおり(於)とかへかへるなるべし。一首なさ
さ。左大臣のやりかふ方ふさき。我が願ひすむところさ。此方よりもよろげうしろへ
などもしてえざるしかうんあるしが。今きいかに甚たるなるんと
思ひて。求て見まバ。思ひしとハ大きに違ひて此比ハ。本承ゑ作づきて
美しき紛と見ゆるすよと云て。下句に。伊勢の往あらさぬきいてこも
まう。さてこの往あらさぬさ方にて思へバ。今ハ他によきうしろさ
はへのはるすと見ゆるすよ。ところきをふく免かへるなるべし。終き
ぞ。伊勢清も。又同じ素性集の方奇をおしかへて。君さ素性集作奇を
おこせかふゆゑ子。我もこさ素性にて答へ作りと云るさんにて。「かく
だきんとこハ。君さ本承ゑ作色付そふくしきさを清純じて。我を頼ひ
かふが。今一股うらめしく思それ作り。そハ何ゆゑなれバ彼(アノ)きみぢ

のいろはよきハ。もし君の見すてゝなほよりかはらずに侍り。かく君子附さ
まかる古里なれど。我も毎日く住てのこし侍り。其後が此比乃時
雨ともに降り侍るによりて。一きハ紅葉は色がうつくしく。錦と
見え侍るなり。もとより家が此比の後を。紅涙にて侍るものをと云
なるべし。かく見ても。二首ながらのことを。おなじく見なりしを。素性集の哥を用ひたるなるんといふが考なり。とへり。
美石云。此説もおもしろし。二首ともに素性集にて。詞書もありて入さ
ふきいふにもゆゑありげなり。然れども。素性集のことなれど。古人の
家集といふものすべてたのもし難きが多ければ。むさおふるに従
ひがたし。されど。此説も一説とすべきなり。

だいしらず　　　　よみ人しらず

うきてゆく 異本集 をしの池乃 歌の心

かもめかうはげにおく露のきえて物思ふころにもあるかな

○意なり。かもめかうはげにとは。鴨の上毛になり。　おくやまのおくてまで。例の。
おく露のめくかきえて。きえてといはん序なり。　きえて物思ふきえんの消入る
をいふなり。古今 哀二 かきくらしふる白雪の下ぎえに消て物思ふ
ころにもあるかな。

おやのおやのかまかりて。おそくかへりければ。つかはしける。まそ未一本 以見
人のむすめのやつなりける。やなる一本

○つか説云。人のむすめのもとといふ。詞書につゞくべ
し。されおそくかへるといふは。すんで帰るがおそきように
ていはゞ帰らぬをいふ詞なり。

かきくづきしぐれふるにもそで日を見まなど 時一本 はなほしとぞ思ふ

○上句は。時雨のたゞ一しきりに早く降る。其時雨のふる間に帰る

にほどなる。冬の短き日なれども。といふなり。

題しらず

身をわけて霜やおくらんあだ人の言の葉さへ(ごと)かれもゆく哉

○わが身。我方にもかれたる事もなきに。彼方にも枯ゆく故に。身をわけて

といふなるべし。とあるがめし。我身と人の身とをわけてといふ意

なり。言の葉さへ枯ゆくとは。疎たる詞の末とげぬさまになりゆ

くをいふなり。無益なる事ハさらになし。師云。古今 巻五 下。秋風ハ身

をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん。とあるも同じ

心なり。考へ合すべしといはれけり。これ身をわけてといふ詞の事なり。但し。遠境の

説もあり。又とくなり。それぞれ人の心にまかすべし。

冬の日。むさしにまかりける。

○武蔵ハ。宮仕の女房などなるべし。

人しれず君につけてし我袖のけさしもとけずこほるなるべし（なりけん 定）（らん 一本）

○君につけておもふ。付てし我袖を。今をつけするなり。けさしも氷る事

をよせたりとおもへバあまたども。いつであらん。おぼつかなし。付け

てし袖とハ。ふれてしと云と。おなじ事なるべし。一たび打とけて。ふ

れたる袖の涙の。今朝ハとけずと云なりと。師説いはれけり。

思ふ事。これ女に逢たる。後朝のわかれ中なる事ゑて。上句ハ。述べいと

みそかに逢たる時に。互に涙を流して。ぬらしたる我袖の。と云こと

なるを。さる深く思ひする中の事なれバ。逢たる事ハきこえやうもなき

えざるやうに（君につけてしなど）いへるなるべし。恋人の間もてきたしか

ふこころとまる事もよりてハ。たしかならぬやうにいふ事ハ。意

の上に常あることなり。下句ハ。かのぬらしたる袖の上ぞ。拾遺をそへて。かくもなきをこそ衣への波の氷たるなるべしといひて。うまときこえさせるなるべし。

題しらず

かきくらしあられふりしけ白玉をしける庭とも人の見るべく　よみ人しらず

○ふりしけを。降しきれなり。敷けよハあらじ。旧句を。敷る庭ともいへるよ。さらずいふまでもなし。一首の意ハ明らかなり。庭などに玉を敷くよハ。万葉六。あらかじめ君来まさんとしらませバ門に宿にも珠しきましを。玉敷てまし御しよりハ。たけそかに来ることよひしたぬしくおもほゆ。同十八。板りに宿をたまへしう御しを大きくの御身こがんとかねてしりせバ玉しかましを　梅雨言之堀

江よハたましきみてはぎてかよらん。などの古哥にはいと多かるを。えらう。玉とハ。美しき石をいへるなり。かしこも。瑠璃瑪瑙などの類のことをいふよハあらず。今も古き山陵などに。小さき白石の。美しきを敷けるあり。これ當時敷たるが残れるなり。

かくなみしぐるる時ぞみよし野の山のみ雪もふりはじめける

○初二句を。都の空ハしぐるる時ぞ。とさすなるべし。山べをことぶ宮さの強き物なれバなり。古今冬上に。み山にハ松の雪だに消なくに都ハ野べの若菜つみけり。とあるハ。春時や暖になるよしをいへるにて今時あると反対ながら。意を通へり。又續古今に。定家卿冬哥を。さえくらすみやこハ雪も降らねど山のはも白き夕暮時雨。とよみたるを。今此集の哥をおもひよせるにやあらん。

けさの嵐さむくもあるかあしびき乃山かきくもり雪ぞふるらし
○上の句と合せ見て、さやかなり。
黒髪乃しろくなりゆく身にしあれバまづ初雪をあはれとぞみる
○重之集。山の人とよそに見しかどしら雪ハふりぬる人の身に
も来にけり。
あさまだきみ山は里乃さびしきハまてたちやまくとふ人ぞなき
○たちやすくハ、たやすくといふに同じ。末摘花巻に「なまめくのたち
やすき御ふるまひなり」といふなども有り。さる山里にて、そぞろ
ことに待来れど、来訪ふ人もなく、いとさびしきよと云
なり。四句を異本に一本もよろしくハあらじ。末句ハ六帖乃方
まさりたるなり。

ちはやぶるかみな月こそ悲しけれ我身時雨にふりぬと思へば
○我身時雨にふりぬとは、時雨の縁と云めぐみに、我身も旧くなりぬる事と
見えたるなり。古今恋五に、今ハとて我身時雨にふりぬればなど云こと
もあり。一首ハ、時雨ハ今年も今を限りになりて、一年のことも行き過ぐるをなげ
くことなるを、時雨にふりぬといひたて、かみな月こそとはいへる
ところ也。初句、ちはやぶるとは、枕詞のならひにつきていはゞいかゞいふべ
きことなり。序にいふべし。さて細注に記すべきことなれども、さてまたむげにわさく字につけて片仮字などぞ
なりて、見わき難くもあるべし。此にハ引つゞけて記せり。冠辞考云、万葉巻二に、千磐破神曽著常（チハヤブルカミゾツクト）
云、巻廿に、知波夜夫流神乎許等牟氣（チハヤブルカミヲコトムケ）と云もあし。狩いとこハ此語ハ古事記
に、詔此葦原中國者、於此國道速振神等之多在、是使何神而将言趣、
まゝ神代記に、勅天稚彦、葦原中國慮有残賊強暴横悪之神者、故汝先往平之

云々。この同じ事を。古事記にハ。借字にて。道速云々とかき。紀にハ。理を以て。残賊云々とかけり。この二つをおもふへて。ちはやぶるのぶるがごとよく来まるなり。然ればこの辞を万葉にはさかしくにかつまどただ。祟をしく荒き神てふことなるを知べし。さて知波夜夫流乃知ハ。伊知を略けり。その伊知ハ。伊都と音通ひて。強き勢ひをいふがなり。伊都に稜威の字を紀にハあつ。波夜とハ。古事記に。伊登志和氣王といふ。同じ王を垂仁紀にハ。膽武別命とかけり。是をもて古事記には假字。紀は理をもてかきたれバ訓と義を相照しみるに。膽は伊都を略けることしるにいふがめし。登志ハ疾なり。波夜きなり。武きなり。然れば知波夜の波夜は。その武く疾に同じきぞかし。俗に氣のはやき。氣のするどき。などいふ。即これなり。よりて心膽の疾くはげしく。祟をしきをちはやぶるといふ事もあるし。且その。夫流ハ辞にて。神左備神さぶる。宮び宮ぶり。夷び夷夫利などの。夫利に同じく。さもありさまをいふなり云々。又万葉七に。千磐破金之三崎乎過鞆吾者不忘牡鹿之須賣神。これも奈良の朝の哥にて。古今集に。ちはやぶるかもの社の姫に。かしびの宮などいふがめく。神のますところハ。此語を冠らしむることわきまるなり。上つ世は。荒ぶる神と。猛き人などにのみ。冠らしめたるを。中つ世より移りきて。よし悪のわかちなく。神てふ冠辞と私になりたるとみえたり。　又ちはやぶる神といふ枕詞ありて。これと同じに。万葉巻十一に。霊治波布神毛吾者打棄乞云々。これも。神代紀に幸魂とみえるにて。他の幸を妨しめる神霊をいふ。これも。此語をかゝしをふなして。たゞちはやぶる神とハいひならはしたるなり。さてちはやぶる

さちをとこの事を罪する縁にて。巻九に。男神毛(ヲノカミモ)許賜(ユルシタマヒ)。女神毛(メノカミモ)千羽日給(チハヒタマヒ)
而(テ)とよめるに同じ。且霊幸(タマチハフ)ハ。善(ヨキ)神をいふ。悪神(アラキ)をちはやぶるといふに
むかへて見ても解得とし。ともえうか。まづ。善神をハたゞちは
ふ。悪神 悪神なればとも。あらびましきすなどをいふ时 にもちはやぶると解すべきこと
なるを。古今集以後となりては。神とだにいへば。ちはやぶるといふ
ことゝなりて。たまちはふといふ詞は。ありとだにしらぬやうに
なりにたり。かくなりきし後には。神の清らへの事をも。いにしへの方
にあるものぞとも。しらぬやうになりもてゆくぞかし。されば。かくまで
おどろかし侍るになん。
式部卿敦実みこの忍びて通ふ所侍りけるを。のちにたえ〴〵になり侍り
けれバ。いもうとの前斎宮のみこのもとより。これをいふにぞ

とありけれバ。その返しに女。
○敦実親王ハ。宇多天皇の皇子なり。 さきの斎宮ハ。柔子内親
王と申て。敦実みこの御姉妹なり。 忍びて通ふ所とある女は。
大和物語に。三条右大臣のむすめ能子と見えたり。 このうた
をいふにぞとハ。程のはるぞ見みこをおそし侍すやといふ
ことをふくめてよめるなるべし。
しら山に雪ふりぬれば。あとたえて今はこしぢに人もかよはず
○我身のうくなりぬれば。親王(ミコ)の絶えて。今ハ通ひもせぬ路をしたと云
なり。越路(コシヂ)を来(コ)し路(ヂ)にかけていへりと也。今まで来(キ)し路(ミチ)に絶絶
て。人も通はずといふなるべし。うつぼ物語蔵開に。山となるゆきぞ
ゆしみおもにゆるたえてこしぢの雪とふりきけ。但此方なるは。城綱を和泉(ジ)来の

きこえいへりとぞゆれど。すべてよく似たれど　白山は。越前國なれ
ど。こしぢといへるの負ひぬるハ是なるべし。
ぞ。越のしら山ともいへるなり。或説に。加賀國ともいひ。縣居大人も。今ハ加賀國に入るよしいはれさ
るは。弘仁より後のことなり。類聚三代格第五子。弘仁十四年
二月戊子。割越前國江沼加賀二郡。爲加賀國と見えたり。

雪の朝老をなげきて

貫之

ふりそめて友まつ雪はうばたまの我くろ髪（くろ髪の又作）のかはるなりけり

○友まつ雪とハ。待に待伴といふ字のあるよりいへりと。契沖法師い
はれたり。待伴雪とハ。初てふりたる雪の。消ぬまて後につぎて降
る雪を待つくるゆゑなり。袖中抄などの説も。此ごとなり。さて此哥ハ。彼
友待雪といふことによりて。又一つの趣向をよみきたるなるべし。
一首の意ハ。世に友待雪といふことのあるは。雪の上にのみと思ひつる

を。よく見れば。年の老て我が頭に白髪の生初（はへそめ）たるより。打續きて生
添ひて。いさゝかなりつる頭の雪が。今は次第に積りいでゝ。白髪の多
くなりたるよとなげくなるべし。　かくて又。師の一説にハ。まづ友
まつ雪といふは。雪の降るハ。興ある物なれども。はえてもやす
友をまつならひなるを。ましてわが身がふりそめて年がよりそひて
は。若き時のめぐくもあらんど。老人のつねのならひとして。いとどかしら
に友のまつらんやうなりたれバ。友まつ雪といふは。此ことが身にふ
ることの頭の雪ぞといふもあるべしといはれたり。此説に見ゆる時
は。次のうへしみ哥の心ぞ。又の一説のかたをとるべきなり。　とも
まつ雪とよめる哥ハ。後撰集といふものに。白雪の色わきがたき梅
が枝に友まつ雪ぞ消残るなど類あるべし。

かへし　　兼補朝臣

黒かミ乃いろふりかはる白雪乃まち出る友ぞうとくぞありける

○友ハうとましき物なれども。黒髪の雪の待出る友ハうとましきと也
是と。抄子ハ見えざれども。さらさとも守えぬやうなり。師云。いさ
さかたしうなりしかども。試子いまだ頭の白くなるを。雪の降初てよ
り後くふる友雪を呼集るめくなりとみさまへども。君の頭の雪や
うふなるらんを。いまだほど遠きるすぞと。いなきなるべしといはれき
里。　さて又一説あり。そはうけおふ友まつ雪と云ふハ。年ふりたる
わが頭の雪ぞといひおくりきたるが。そのかしらの雪のまち得ふ
友ハ。うとくしき物ぞとなり。庭の雪ハ。興ありてめでもやすならひ
なれぞ。見ふ来る友もあるならひなれども。かしらの雪ふなりて。年
のふりたる人の待ゆる友ハ。待得がたうるべしとなり。

又　　貫之

くろかみと雪との中のうき見れば友鏡をもつらしとぞ思ふ

○袖中抄云。友鏡とハ。我髪人の髪の白きを。雪ふ見合せたるなり。愚按
兼補の。髪の雪の友を待うしきと云へるをうけて。我髪の雪の友の
うきを見れば。人の頭の雪をも。つらしと思ふとなりと。抄子ハあまた
ども。是もたしかならぬさまなり。袖中抄の説も。元来此歌一その上ふていへるなり。師云。此
歌も二説あり。まづ一説例の試子いはく。友達の黒き頭と。我が白髪
のうきとをくらべて見れば。てらし合せて見る。友達までをつらく
思ふ。と云なるべし。　又の一説ハ。黒髪の白くなりて。白雪となり
たると。庭などの雪ハ白雪とをくらべて見れば。友がみをもつら

くらふといふなり。そは己が頭の白雪ハ。鏡にてこそ見る物なれバなり。
鏡にて見るにつきて。わが白髪をもてらしといふ
を。以前の諸抄に友だちなる人をよみしさて。鏡を見るにも。合せ鏡
にて頭を見ることあるに。其合せかゞみを常に友かゞみといふに
ならへて。友といふことをいはん料に。友鏡とよめるなり。友かゞみなら
でも。頭の雪ハ見ゆれども。友をいはん料に。友かゞみとよめるなり。
これらの説。見る人の心にまかすべし。といはれたり。　友鏡とハ。今
俗にいふ合せ鏡のことなるべし。他に例證などハいまだ見出ざれど
も。決て合せ鏡のことと定む。それを今ハてらし合せて見る友達なる
になぞらへたりときこえたり。

返し

兼輔朝臣

年ごとにしらが乃数をます鏡見るにぞ雪の友ハしりける　六帖

○おもふに。其の友鏡と見るにつきて。我も鏡を見て。髪の雪の数そふ
ことを。知おどろきしとなり。とあるがよし。　雪の友ハ知ぬるといふ
に。我も老人の友となりたることを知るよといふを。かねていはれさ
るなるべし。　此説も。師の一説あり。又の説にしに。頭の雪を友鏡し
てらえて。其のくといひおこせらるが。下また浅く見るもの。老人の
なりひ。年毎に白髪の数のまさることなるを。その白髪を鏡にうつし
て見きバ。頭の雪を庭などにふれる雪の友達なるよしとなり。かしら
の雪を鏡にて見きバ。実の雪の友が出来て。雪の友なるよしとなりと
いはれたり。　ます鏡を。冠辞考云。真澄鏡てふをなり云々。そもそも古
き史などを考るに。上つ代にそ。八咫鏡日像鏡　此ハ八咫鏡日像鏡ヲ。やたの鏡。ひがたの鏡。ナ

トの文字ヲ入レテハ。ヨムマジキ事。古事記傳巻八ニ。於至大人イハレタリ。などもいへり。さて出雲國造が。神賀詞に。御表知坐麻蘇比乃大御鏡てふも。かの日像の鏡をもて。天つ日を譬へるなれば。真澄日之鏡てふなるなり。須美の約ましなる我曾に轉じて。麻曾云ことをいへり。かくて後には。巻十三。万葉ヲ真十見鏡。巻十六に真墨乃鏡など字を具に音を轉じ出しも。云之。轉しハ右にひとし。又冠辞に見るに至て言を畧きて。麻曾鏡といふより。字をもさまぐに借てかけたりとみえたり。今此歌にても。白髪の數を益と云かけたるまで。いふもさらなり。

新しら更　よき人しらく

年ふれど色もかはらぬ松が枝にかゝれる雪を花とこそみれ

○色もかはらぬとハ。其木ハまだもえ初るより。花さきなどすれば。凡時をりくに。けしき見になるを。松ハいつも同じきをいふなり。いつも同じ色なれば。たゞ雪の降つもりたる時を。花さきて。皆見になるなりと見るといふなり。　抄に童蒙抄云。松花ハ一千年にさくと本文ありといふを引けれども。此十かへりの花の事にはあづからざる事と思はる。

霜がれの枝となわびそ白雪の消ぬかぎりは花とこそ見れ

○冬枯の枝も。雪にむと見ゆれバ。なわびそと。なぐさめしなりと。抄にあるがめし。此すうゆゑあるをりからにて。よせていへる歌もあらんかし。なども思ひつきど。よく味ひ見るに。たゞ冬枯の木に。雪はふりかゝれるを見て。さらぬ見るまゝをよめりと見ん方。穏なるべし。若衆万葉集に。霜がれの枝となわびそ白雪をむさ雇手見まど

あられぬといふもあきばなり。

氷こそ今はすらしも（たぎつせのなかる音も絶てきこえぬなり云々）みよし野の山のたぎつ瀬声も聞えず

○言明かなり。今は氷こそ結ぶらめといふなり。（をあしむきの意）続後撰冬に。氷とく

春たちぬらしみよしのの瀧のおと増さるなりとあるを

も引合せてしるべし。たぎつ瀬のつは。天津空。國津神などの例に

音通ひて。端に書くづなり。万葉に。たぎち流るゝと云も。ちとつと通

ひて。たぎつ流るゝなり。又たぎと滝るべし。滝とかくも。滞（タギ）るゆゑにて。

万葉にも多藝（タギ）とかくべき字をかりと縣居大人いはれたり。

（冬の松をみる云々）松をさへ雑覚てきけぞをしぞなく拂ひもあへず雪やおくらん

○拾云。我が様ぞそのたくが北に。身をつけて。霜の置きなるをも。上毛乃

雪をわびてふやと。思ひやるらんなり。

雪のすこしふる日。女のもと（の許に也）につかはしける。　藤原かげもと

かつ消えて空にみだるゝ（ふ又一本）あは雪は物思ふ人の心なりけり

○雪の降る片方（カタヘ）よりつもりもあへず消る意なり。即ちが思ひみだれ入る

ながら。思ひ乱れて。一方ならぬもの思ひなるにたとへたり。思ひ

合せたるよ。となり。急ぎなるをハ編なし。　二句ハ空にとある方

を用ふべし。　あは雪は。和名抄云。沫雪（阿和由岐）其弱如二氷沫一とある義にて

暁けし。後世には。春の雪をのみいふめれど。春冬のうちに限らず。たゞ消やすきを云なり。

師氏朝臣のかりして。家の前よりまかりけるを聞て。

よみ人しらず

白雪のふりそへてをるとはざらんとふたよりをすぐさげらなん

○袖にふりさへは態(ワザ)といふ事なり。ところハ雪の解るに来るなどを
へたり。わざところ、とちぎらめ。かく来る便宜あるまで、あより多く
かしとなりとあり。げに一首の意ハ、此從のめし。從者ども思ふ子。洞に
之ふ。狩して云くとあれバ、同句のところハ、もし糟によせある洞に
をわらじか。よさけび とぶち とかへ子 とぐら とかげ と紹て など云
洞もあまれバなり。從者ども鳥来(トク)るといふ事ハ、あるべくも思されし
きいふあらんこそ伏子おどろかしおくなり。又ハ外(ト)より来るた
よりハといふ事でもあるべし。 初句ハふりさへといさん料なの
ら、平をり時雪のさまにてもあるべし。 ふりはへきゝ、抄子いへるが
ぬく、伏子わざくとし云事なり。古今 春上 春日野の若菜つみにや白
たへ乃袖ふりさへて人のわらん。若紫巻 紫上君の、まざいとけなくて北山の僧都の許におそ

すれ、源氏君の内みやりかふ所に、山里人にも久しうおとづれのたえざりけるを、お
ぼし出て、ふりさへ来したりけれバ云々、など猶多くあり。

だいしらず

思ひつゝ寐なくに明る冬の夜乃袖の氷りハとけずもあるかな

○袖思ひつゝいも寐ざるに明ると云を、声を泣くにかけたり。寐なくに
も不寐(ネズ)にも。 袖の氷ハ、涙をいへるなり。 さて此歌ハ、拾遺 恋二 君
恋る涙に氷る冬の夜ハ心とけたるいやも寐らるゝ、などの類にて、
恋乃さなるらん。 又ハ、新拾遺 哀傷 加まふし年をハ寐へだてぬれ
ど袖乃氷もとけぞそめける、などいふもあれバ、たゞよ時名の物思
ひのあげきなるらん。 末句、とけずもあらなん、とある本もあれ
ど、それよろしからず。

あらたまの年をわたりてあるがうへにふりつむ雪のたえぬしら山（きえぬ 宿又家持集）

○一年の間消えずにあるがうへに。冬になれば。いよいよふり積る雪の。たえざる山なりといふなり。又ハ。あるがうへにふりつむ雪の。年をわたりてきえざる山ぞ。といふ心にてもあるべし。しら山ハ。越前國の白山なり。さて此哥。しら山といふに。雪の白きことをかけるにもあらんか。

まこもかる堀江にうきてぬるかも（鴨）のこよひの霜にいかにわぶらん

○まぢかなり。まこもかるハ。真菰を刈るといふにもあらず。菰の物を以て。枕云（又ハ国ともいふべし。次が年ぬる。又あしのちる難波の江ハ河なり。なく作な借川などの類なり。）のめぐりおきたるなり。ほりえハ。浪速堀江なり。仁徳天皇の御時にほらせ給へる事。紀に見えたり。

白雲のおりゐる山とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり

○おりゐるハ。下り居るにて。（天空(ソラ)より。山の高嶺に降り来ることなるべし。）雲の山に掛りてあることをいふなり。又ハ白雲の下り居る山ぞとみえしハ。降積れる雪の消ざるにてありけるよなど云なり。菅家万葉。冬なれバ雪降積留(ツメル/ツモル)高き嶺たつ白雲と見えわたるらん。

ふるさとのゆきは花とぞふりつもるながむる我も思ひきえつゝ

○故郷の荒たる様にて。雪の降る日に。つくづくと眺め出したるさまをいへるなり。

ながれゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草の跡はとゞめぬ

○冬になりて。萍(ウキクサ)の枯果るをよめり。水の流るゝ時こそさそはるべけれ。氷とぢたる冬さへ。枯て。水草の絶んなりと。[illegible]に見えたる事

おぬくなるべし。又一説にいはく。意あはで。不実気なる人など
を恨たるにハあらじかとも思へどもいかゞあらん。
ん。あさて（おきそ 六帖又一本 八雲）有明見ぞこそわかれ白雪のなげきうる花のちるに似ぐん子
○雪ふるふりかゝりて散るを。推量にかきうハ雪なりと思ひて見だ
こそ。おもれとも見わくべかられ。たゞうちみえするさぬハ。実に花に異ぬ
らねバ。見わくべくもあらじといふなり。　二句。見ぞこそ阿うえ。とあ
ふ本ハ誤なるべし。
天乃河冬ハ氷りとぢれやいしまんたぎり音だにもせぬ　素性
（浦　座右人冰り　の異　冬までハ氷まぞやいしまふ　六帖　づれ異）
○とぢられや。とぢられたるにやといふことなり。　此天河ハ河内國なるべ
し。銀河をもにやとおもふ見ゆれば。思へぞ。天上の銀河の
ぬくハ音きこえざるやうなれども。さりとて。河内國の天河などのうへと
しては。あはれなる河のあぢはひもなし。よりてよく思ふに。こゝなる天
漢の事なるべし。然るハ。冬になれば。此國の山河など氷とぢて。瀬（タギ）つ
瀬の音も絶になれば。ふと天漢（アマノガハ）を仰（アフ）ぎ見るに。音もせざれば。さてハ天
がの銀河も冬ハ氷にとぢたるにや。たぎち流るゝ音も聞えざるらん
よと思ひよせるなるべし。銀河に音ありといふも。音のあらざれ（ぜいうなりなどいふ）
風雅の心なくんバわからざる論なり。かく言方に。そがなくいひてこそ。あ
はれも深けれ。天うへの事の柱も秋も紅葉すればや思ほさる
らん。などゞも同じくなんぞく
なるを思ふべきなり。
わしなべて雪ふれば我宿の杉をたづねてとふ人もなし　松 六帖
○雪のいたくふりつもれば。杉をも降うづみて。あるしるしの杉のみえねバ。訪ふ
人もなしとなり。古今 雑下「我庵ハ三輪の山もと恋しくハとぶらひ

来まセ杉たてる門。とよみていへる事を。いふまでもなし。六帖に
松をとあるハ。写誤にてもあるべし。必杉(スギ)をといふべき所なれば
なり。　山里人などのよめる歌なるべし。

冬乃池の上になかるゝあしがもはうき寝ながらにいくよへぬらん

○水に流るゝとハ。水の上にある事を。流にあるがごとく見ゆれば
いふなるべし。　うき寝ハ。鴛鴨などの。水の上に寝る事なり。　かく
て此哥。上句ハうき寝といはん序にて。うき寝ながらにハ。物思ひを
しつゝ。独寝をのみするよしをいへる。恋哥にはあらざれども。恋
めきとなるらんにハ。二句ハ。流るゝに。泣(ナカ)るゝをかけたるにもあるべし。
恋の哥とみる時ハ。三句の文字ハ。のめくといふ事なり。又あし鴨を
よめる哥なれバ。のハ用語の助文字なり。　あし鴨ハ。弁経の細注に。
鴨ハ。蘆邊に住物故に。蘆鴨と云説もいへどあるべきよしもみえたるを。
さる事なり。千秋翁の。あしたづとハ。白き鶴をいふ。蘆の花の白き
によれる名なり。万葉にも白鶴(アシタヅ)とありといはれたるによらば。あし
がもも。白き鴨をいふなるらん。鶴のやうにこそなけれ。鴨にもくさ
ぐさある中にハ。やゝ白きもあればともいふべけれど。此あしたづ
の説もいさゝかあかぬ所あるに似たれば。猶考ふべきなり。万葉に。
葦鴨(アシガモ)。安之我母(アシガモ)。阿之賀毛(アシカモ)などかゝれど。加文字ハかならず濁るべき
なり。

躬恒集
山ちかくめづらしげなくふる雪は白くやならん年積りなば

○相小序なるべし。年つもりなば。我頭も白くならんとなり。とあるが
ごとし。

松の葉にかゝれる雪のそれをこそ冬の花とはいふべかりけれ

○それは末なり。されどこゝにては、それといふさしも用なく聞え
ねば、思ふにこれ其れの写誤にもあるべし。一首のさまはあきらか
なり。

ふる雪は消でもしばしとゞまらなん花も紅葉も枝になきころ

○きえでもは、不消(キエズ)してなりて、で文字濁るべし。このうたはあきらかなり。
新古今冬部　ころもき花も紅葉もえだになし、しばしな消えそ松の白
らゆき。

涙川身なぐばかりのふちはあれど氷とけねばゆく方もなし

○拾子或抄云。涙は深けれど、人の心とけ合はねば、ゆかんかたなきの心なり
とあり。げに其意にて、此歌のこゝろなるべし。氷とけねばとは、人の
心のとけざるにたとへたるなるべし。行方もなしは、或抄の説の如
く、心のゆく方なからんか。されど心のゆくを、たゞゆくかたといひ
たる例などすくなし。おぼつかなけれ。いはゞはからん。もしは、せん
方もなしといふ意なるを、川水の縁にて、ゆくといへるにもあらざ
らんか。

ふる雪に物思ふ我身おとらめやつもり〳〵て消ぬばかりぞ

○消ぬばかりは、不消(キエヌ)にはあらで、をれぬばかり、ちりぬばかりなどの
ぬ、くきゆるばかりぞのさまなりと、契沖法師もいはれたるがごとし。ぬ
ぞ、いはゆる畢(ヲハンヌ)のさまなり。萬葉集に物思ひてよふふる雪のはなびし
きはつもり〳〵てきえぬばかりぞといふもあり。物思ふ身の涙もり
つもりて、消ぬばかりにぞ、我身も消果るさまぞといふなり。意のさまなら

んか又ただ物思ひある人の哥ならんか定めがたし。

よるならば月とぞ見まし我宿の庭しろたへにふりしける雪（花とや疑　つもるしら雪一本　しける貫之集　ふれる白雪拾遺又一本）

○古今冬。朝ぼらけありあけの月と見るまでによしののさとにふれる白雪

しら雪也。

梅が枝にふりおける雪を春近み目のうちつけに花かとぞ見る（つむ　は一本　ところ見まがふ子）

○目のうちつけには、目のさしあたりにといはんがごとし。上　春に近き（上）なりと云つるからに春日山消えぬ雪は花と見ゆらんとよめるを。

春の残雪はすでにあまれども意は通へり。

いつしかと山の桜もわがごとく年のこなたに春をまつらん（でとや一本）

○我が春を待つごとく山の桜もいつしかと冬よりして春を待つらんとなり。　年のこなたには、冬より待ちかねて、さて春をまつなり。

なるころにいふべき詞なり。　此哥を契沖法師は清正集に「年かへりておいらんとたのむ身よりも女に、しらすに「花さかぬ松の立枝も我ごとや年のこなたに春を待らんとあると一つなるべしといはれり。　いつしかとぞ、いつしかと云ことにて、待遠に思ふことなり。

初句三句、句などのさま、げに意の言にて、此清正集の哥など同じかるべく思はるれど、必意の哥なるべし。（我まどもかくぞ万に三の句以下などの同じきをい）と多かれど、此哥やがて彼哥なるべしともいひがたし。

としふかくふりつむ雪を見る時ぞこしのしらねにすむ心ちする（之一本　ふしのたかねに白妙文貫之集）

○こしの白ねは、八雲御抄に、越の白山に同じとあり。白ねの根は、山乃ぞ、山の巓を云詞なり。ねも真根にて、真は稱ていふ言なるを、あがた大人などの説、これがまに見えより。万葉に、たかねといふ事、高嶺高峯などかけるをてさとるべし。

年ふかくは、冬深くといはんがごとく、年の末のを

なり。さて深く隠積といひかけたるなり。

年ふれて春あけがたになりぬれど花のためしにまがふしら雪（とや見 ／ きかく ／ ふれる六帖 ／ きかも一本）

○抄云。花のためしは。様の字なり。花の様体にまがふとなりといへり。今思ふに。様の字なりといへるはさもいはるゝ事ながら。げに。さは。俗にいふ様体（ヤウダイ）といふに似たる方にきこゆ。然れども。此詞かくざまにつかひたる例。いまだ見え出ざれば。たしかにはいひがたし。又春の方といふも。見なれぬめづらしきことばなれど。よく思ふに。すべて年にも秋にても。果（ハテ）の末になりて。彼方此方の界（サカヒ）をいふ時は。何方よりも云詞とおぼしきなり。たとへば。春の秋の方といひて。朝の方とする時は。今朝の方ともいひ。雅言にても。けさの朝けといふ類。後にも此類多く。此哥なるを。春の方といふべくなるべし。すべて。此注釈又別記にも例など見出て。別記又は追考にいふべし。らせる事。又後にて不足ず及びすんくこの考などを。皆追考に記すべきなり。

春近くふる白雪は小倉山みねにぞ花のさかりなりける（近くなりみ又 ／ こそ ／ かくれ一本）

○小倉山は。山城なり。一首の意は明らけし。春の近くなりたるによりて。花の盛と見ゆるよしなり。上の。春あけ方になりぬればといふをも見合せてしるべし。

冬の池にすむ鳰鳥のつれもなく下にかよはん人にしらすな（をし ／ 氷の下を我はかよはん六帖 ／ さしもうちとくる古今集）

○此哥は。古今恋三に出て。同句。そこに通ふとあり。古今にては。下に其評をかけたるなり。鳰鳥の。氷の下を行通ふめく。人目にかゝるなどせぬやうに。いとむつかしく通はんゆゑ。さるけしきを。人にしらするなかれとなり。上句は序にて。つれもなくは。氷の下を通ふ故に。上へは。さも見えぬよしなり。此詞は序のうへのことにて。哥の意にはあづからぬと。

鈴屋大人に従いはれたり。にほどりハ。和名抄。鸊鷉。和名遠保。野鳧小而好
没水中也とあり。俗にカイツブリといふものなり。

うばたまのよるのまにふれる雪をてらす月かげのきよげなりけるを

○さやかなり。夜のまにふれるといふにつきて。月影の積るなるよ。
といへるが此哥のたくみなる所なり。

此月乃年のあまりにたらざらはうぐひすハはや鳴ぞしなまし

○此哥ハ。十二月に閏月のありける年によめるにて。此月ハ閏十二月なり。
年のあまりにたつとハ。十二月の一年に餘りて。閏月のあるよしの
年立つとハ月の来るをいふ。一とせのきハ。此閏月のなくハはや
正月なるべきを。鶯ハ鳴べきものをとよめるなり。此の説非なり。
三句。たら(良)ざらばとある本も誤なりと鈴屋大人いはれたり。此哥。
六帖に閏月の歌に載たり。三句ハ不足(タラザラバ)者なり。かくて抄本子ハ。たら
ざらバとありて。[illegible]これも有餘と不足とをたがへたるに
て。是ハ此閏十二月が。十二月の閏餘(アマリ)三十日(ヒトツキ)に不足(タラズ)を。今月(此閏十二月)
はやく正月なれば。鶯ハはや云々と云意とみんも。叶るべきさまな
きとなり。

関こゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつかな

○年にさはりてとハ。一夜隔ても。いまだ春ならぬをいふなり。いと近
きにみても関の隔あれば。それにさへらるゝごとく。一夜のみても今
年と来年とのへだてあるにさはりて。春を待つことかなとなり。

みくしげ殿の別当に年をへていひわたり侍るを。えあはずし
て。其年のしはすのつごもりの日つかはしける。

○御匣殿ハ。御服を司る所にて。上臈の女房を別当とするよし。拾芥抄等にみえたり。此時乃別当ハ。清慎公の女なるよし。大和物語にみえたり。

藤原敦忠朝臣

物おもふとすくる月日も（月日のゆくも大和物語）しらぬまにことしは（もまた一本）けふにはてぬ（かきる一本）とかきく（なりにけるかな又の一本）

○物思ふとハ。物思ふとてなり。此歳をぬる事をのミ思ひてうつくとして。月日の過るをもしらで居つる間に。年ハ暮果て。はや今日一日になりしとかきけり。さて其いつまでかくのミなげくべきぞとなり。末句。はてぬとかきく。とあるにて。物思ひにのミあれたるさま。あはれに聞ゆるなり。大和物語にハ。右の哥につゞけて「となん有ける。又かくなん。「いかにしてかく思ふてふ事をだに人づてならで君にかたらん。（此哥ハ下意五ニ出タリ。）「かくいひてつひにあらぬにはあしさまにのミいはれなばさそとおもへどもたえぬ人のたのめなりけり。（此哥モ下意ニ出テ。トモニ敦忠ナリ。）とあり。

後撰和歌集巻第八新抄

尾陽東壁堂藏目録之内歌書之部

古事記傳　全四十八冊
神代正語　全三冊
神壽後釋　全二冊
玉くしげ　全一冊
古今遠鏡　全六冊
天祖都城辨々　全一冊
御僊行長哥　全一冊
源氏物語手枕　全一冊

玉勝間　全十五冊
地名字音轉用例　全一冊
直毘靈　全一冊
美濃家づと　全五冊
同折添　全三冊
曆朝詔詞解　全六冊
三代考　全一冊
萬我のひ禮　全一冊

萬葉集略解　全三十冊	鶉衣　全十二冊
後選集新抄　全十五冊	枇杷園七部集　全四冊
遷宮物語　全三冊	同　蕟句集　全四冊
熱田縁記　全一冊	同　寉芝集　全五冊
志らのもみゝ物語　全二冊	狂哥初日集　全二冊
家ゝ随筆　全五冊	同　支蕘集　全二冊
冠位通考　全一冊	同　初心集　全一冊
江戸職人哥合　全二冊	同　不卜集　全二冊
尾張家づと　全九冊	同　年中行事　全二冊
伊勢物語　全二冊	同　作者部類　全二冊

後撰和歌集新抄　全　二冊
同　別記
文化十一年甲戌暮秋發行

書肆
京都　風月庄左衛門
東都　前川六左衛門
浪華　森本太助
尾張　片野東四郎